中学校第２学年美術科の鑑賞における，美術作品の「見方を深める」ための学習指導法に関する研究
－感性と知を働かせるため，相互に交流する活動を通して－

広島市立安西中学校教諭　　山　田　直　子

Ⅰ　研究主題設定の理由

美術科教育における鑑賞指導では，生徒が作品のよさや美しさなどを豊かに感じ取れるように指導することが大切であり，現行の『中学校学習指導要領解説－美術編－』にも鑑賞指導の一層の充実を図るように記されている。

これまでの鑑賞指導を振り返ると，生徒が美術作品の特徴や価値などの知識を得ることを中心とした指導になっていたように思う。このような指導を通して，生徒は美術作品のよさや価値を知識として習得し，作品の見方を広げ，深めることができるものと考えていた。そして，そのことが鑑賞の能力を高めることにつながると考えていた。しかし，生徒自身が美術作品を時間をかけてしっかり見るという活動がおろそかになったり，身に付けた知識においても与えられたものであったりすることが多かったために，生徒が理解したことを作品に対する感じ方にしてしまいがちになっていたように思う。これでは見方を広げ，深めるということは不十分であったのではないかと考える。

したがって，生徒が作品から何かを感じ取り，考えや思いを深めることのできる場をつくる必要がある。そして，美術作品を見ることを中心に，知識をもって見たり，また自分の考えをもって見たりすることができれば，見方を深めることができるのではないかと考える。このことが美術科教育における鑑賞の能力の向上につながるものと考えるのである。

そこで本研究では，美術作品の見方を深める鑑賞の指導を追究していきたいと考え，その指導法を探ることとした。

Ⅱ　研究の方法

生徒が鑑賞の能力を高める上で，美術作品の見方を深めることができる学習指導法を，鑑賞の授業実践を通して探る。

Ⅲ　研究の内容

１　研究主題に関する基礎的研究

(1) 美術科教育における鑑賞

遠藤友麗は，美術科教育における鑑賞について，「他者の表現からよさや美しさを感じ取り味わったり，感情や意図と工夫などを読み取ったり，文化の違いやよさを尊重し合ったりする学習を通して，自己と他者の視界を広げ豊かな生き方を見いだしていく活動である。」と述べている。

しかし，生徒の実態は，鑑賞を通して豊かな生き方を見い出すまでには至っておらず，鑑賞後の感想にも「〇〇が描いてある」や「迫力がある」などの記述がよく見られる。これは，美術作品を漠然と見たり，既習の事項に照らして見て分かること，直感的に自分が感じたりしたことを感想にしていることが多い。これでは，「表現のよさを感じ取る」ことはできているものの，「自己と他者の視界を広げ」るまでには深まっていないのではないかと考える。

美術作品に向き合うことにより，作品から見付けたことや感じたことを生徒自身が明確にし，それをことばや文章で表現することができる。さらに作者の意図や自分以外の人の感じ方や思いまでを知る機会をもつことで，美術作品の見方を広げ，深めることができる鑑賞の活動になると考えるのである。

(2) 「見方を深める」について

「見方を深める」とは『中学校学習指導要領解説－美術編－』には以下のように記されている。

> 「見方を深める」とは，単に直感的に感じる美の感覚だけでなく，形や色の特徴や性質，用具や材料の基本的な用い方などの知識や，自らの技能・経験に立脚した見方及び作者の表現の精神や感性，生き方などと作品とのかかわりなどの視点から，感性と知の両面を豊かに働かせ深く味わうことを目指している。　＊ 〰〰 は加筆

このように，美術作品の「見方を深める」ための鑑賞活動においては，感性と知の両面を働かせる活動を展開する必要があると考える。感性を働かせる活動においては，前述したように，よさや美しさなどを感じ取ることができる活動を行う。また，知を働かせる活動では，これまで身に付けた知を生かし，さらに意欲的に学習しようとする態度を働かせる活動を行う。そして，それらを相互にかかわらせながら学習を展開していくことが「見方を深める」指導になると考える。

(3) 美術科教育における感性と知

遠藤友麗は，美術科教育における感性と知について次のように述べている。感性とは，「よさや美しさなどの価値，他者の心情などを感じ取る力のこと」である。また，知は「新しい価値を見い出したり，新しいものをつくり出したりすること」である。美術科教育における知とは，生徒自らが活動して何か知ることを指し，学習活動で働かせることのできるもので，その「知を代表するものが創造性」であると記している。本研究では，感性と知はこのようにとらえていくものとする。

そして，感性と知をかかわらせながら，その両面を高めていくのである。したがって，鑑賞の指導をするうえで，両面を相互にかかわらせることにより，共に高めることをねらうように学習展開を工夫する必要があると考える。

(4) 生徒が相互に交流することの意義

現行の『中学校学習指導要領解説－美術編－』への改訂に際し，指導計画の作成と内容の取り扱いに関して，以下のことが新たに設けられた。

> 学級全体やグループなど形態を工夫して，一人一人が作品表現への自分の思いや工夫したことを発表したり，他者のよさを認め合ったり，よりよく批評し合ったりする学習の機会を設けることが大切である。

鑑賞活動を行うということは，前述したように美術作品を見ることで自分なりの思いや感じ方をもつということである。しかし，これは個人的な活動に陥りがちである。そこで，班や学級全体で自分の思いなどを発表したり，それを聞いたりするといった相互に交流する活動を設けることで，多様な見方ができるようになると考える。作品を見て抱いた感じ方や思いを交流するためには，自分の感じ方や思いを明確にする必然性が生じる。さらに，自分以外の人の見方を知り，その感じ方や思いに触れ，理解したり共感したりすることにより，それらを認識し，自分の見方に取り入れ生かすことができる。

これらのことにより，美術作品の見方を深めることにつながると考えるのである。

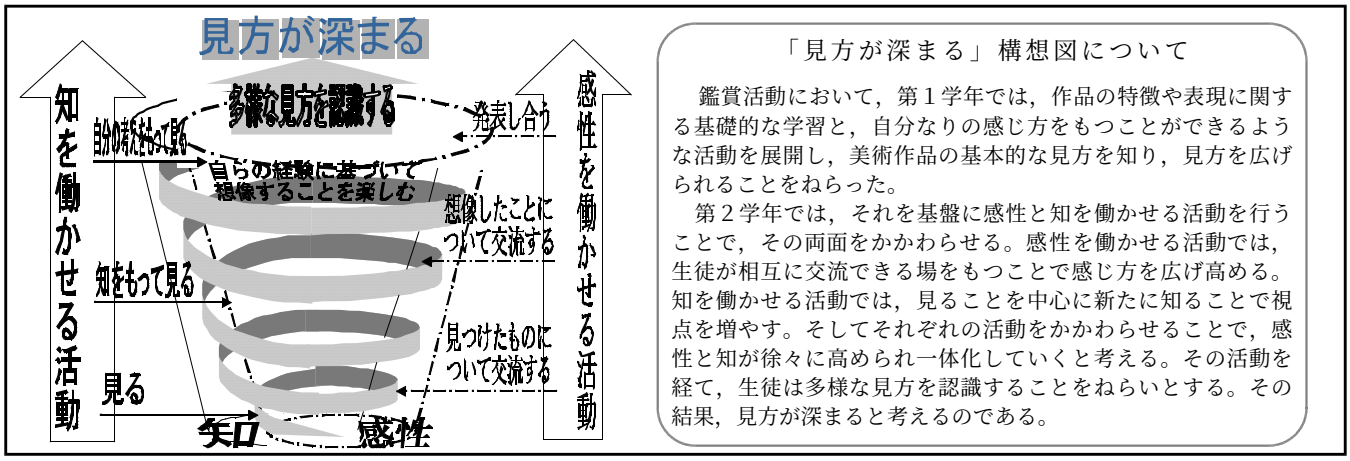


図１　中学校第２学年における「見方が深まる」構想図

2　検証授業の計画と実施

(1) 対象生徒　中学校第２学年

(2) 題材名　「西洋を魅了した浮世絵」（『美術２・３上』P.34,35　日本文教出版　2001）

－自己紹介文をつくろう－

(3) 学習指導計画の作成にあたって

感性と知を働かせることのできる活動を組み込むこととし，以下の点に配慮した。

○　意欲的に知を働かせるための工夫

これまでの実践を反省し，生徒が美術作品について調べたり，想像したりすることで，意欲的に知を働かせることができるように考えた。その対象とする美術作品は西洋画の肖像画である。しかし，その西洋の人物の背景には，日本の浮世絵や屏風などが描かれているものを提示し，生徒が興味をもって見ることができるようにした。

○　相互に交流する場面設定の工夫

感性を働かせる活動として，生徒が相互に交流する場面を毎時設定した。まず第１時では，主に班で話し合い，個人が発表する。第２時では，班の話し合いを行い，第３時では，それを学級全体で発表するという展開とした。

表１　学習指導計画

	学習活動	活動の内容 （知）　（感性）	教師の支援 知を働かせる活動に関して	教師の支援 感性を働かせる活動に関して
第１時	1　作品を見て，初発の感想を書く。 2　作品の構成物を見付ける。そして，作品に対する疑問をワークシートに記入する。 3　見付けたことを発表し合う。 4　作品について調べ，ワークシートに記入する。 5　調べて分かったことを学級全体で確認する。 6　再度作品を見て感想を書く。 7　作品をさらに2点追加して見て，3点の表現上の共通点を探す。	**見る** **見付けたことを交流する** **知る** **知ったことを交流する** **知って見る** **見る**	・　ワークシートに記入することで，見付けたものが確認できるようにする。 ・　板書により自分の見付けた構成物を確認できるようにする。 ・　班で協力して調べることにより，作品の基礎知識を得ることができるようにする。 ・　自分と他の人が知ったことが全く同じではないことを知らせ，多様な見方に気付かせる。 ・　作品について基礎的なことを知った上で再度作品を見て新たに発見したことを認識させる。 ・　作品の構成上に共通点を見付けるようにさせる。	・　人の考えを聞くことで作品の構成物を新たに発見できることを気付かせる。 ・　学級全体で内容を交流することで，作品に対する感じ方を広げられるようにする。 ・　学級全体で交流し，共通点を自分のものとして認識させる。
第２時	1　3点の作品について共通点を確認する。 「タンギーじいさんの肖像」 「ラ・ジャポネーズ」 「エミール・ゾラの肖像」 2　浮世絵について時代背景や表現の大きな特徴について学習し，浮世絵の影響について考える。 3　自己紹介文を班で作成する。作品に描かれている人物に成り代わり，班で文章を作成する。	**見付けたことを交流する** **知る** **知ったことを交流する** **自分の考えをもって見る** **班で話し合う**	・　西洋画の背景に浮世絵などが描かれていることを知り，浮世絵に関心をもたせるようにする。 ・　浮世絵の影響を想像できやすい資料の提示を行う。 ・　浮世絵についての基礎的な知識を得た後，各自が想像できるように西洋に与えた影響について提示する。 ・　学級全体に自己紹介文を発表することを意識させるために，自己紹介において必要な項目を確認する。	・　認識したことを実感させ，作品や表現などに関心をもち，自分なりの考えをもたせるようにする。 ・　近くの生徒同士や班で話し合えるようにすることで，想像しやすいようにする。 ・　自己紹介で必要な項目を共通認識することで，作品から想像する内容を明確にする。また，班で考えを出し合わせることで，多様な考えに気付かせる。
第３時	1　前時にまとめた内容を班で確認する。 2　班ごとに発表する。 3　「タンギーじいさんの肖像」の感想を書く。	**自分の考えをもって見る** **班で話し合う** **学級で発表する** **多様な見方を知り，自分の考えをもって見る**	・　作品について調べたり，作品を見たりすることで想像できる内容になっているかを確認するようにする。 ・　ワークシートに他の班の発表に対する感想等を記入することで，作品に対する見方の多様さを気付かせる。 ・　本題材最後の感想を書き，最初の感想との違いに着目させるよう感想プリントを活用する。	・　自分と班員の考えの相違に気付き，それを認識できるようにする。 ・　班員全員が発表することで交流のよさを感じ取れるようにする。 ・　自分の感じ方や思いとの相違を知らせるようにする。 ・　学級で発表し合うことで認識した見方を意識しながら，再度，感想が書けるようにする。

○　自己紹介文の作成を通して

作品に描かれている人物に成り代わって自己紹介文を作成することは，対象となる作品を何度も見つめることで，人物の性格などを想像することを必要とする活動である。このことは人物についての自己紹介のための情報を得る知の側面と，人物の性格などを想像することから感性の側面の両面を働かせる必然性が生まれると考える。全３時間の学習を通して，感性と知の両面を働かせることをねらいとし，自己紹介文を作成をする場面を設定した。

３　検証授業の分析・考察の視点

「見方が深まる」ことについては，感性と知のそれぞれの面に対する生徒の感想やつぶやきの質と量の変化から，以下のように分析する。

○　学級全体の感想と自己評価の質の変化

○　個人の感想やつぶやきの質と量の変化

・　学級における個人の感想の変化

・　同じ班内での個人の感想の変化

４　検証授業の結果と考察

○　学級全体の感想と自己評価の質の変化

第１時において，作品から感じたり，考えたりすることができたと自己評価していた生徒は，８割強を示している。

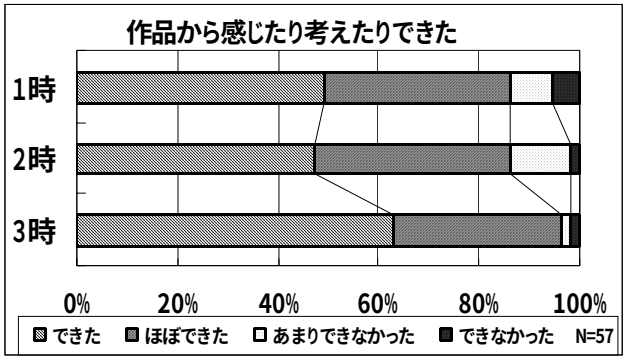


図２　鑑賞の能力に関する生徒の自己評価票の記述

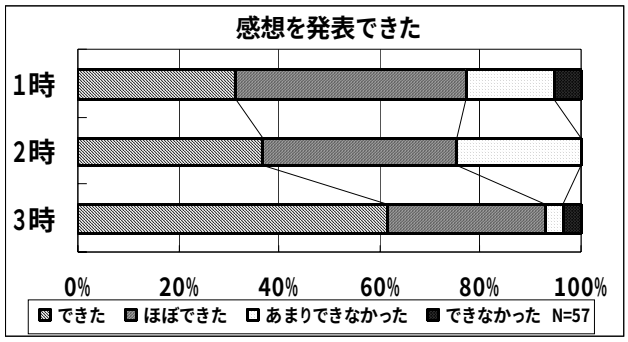
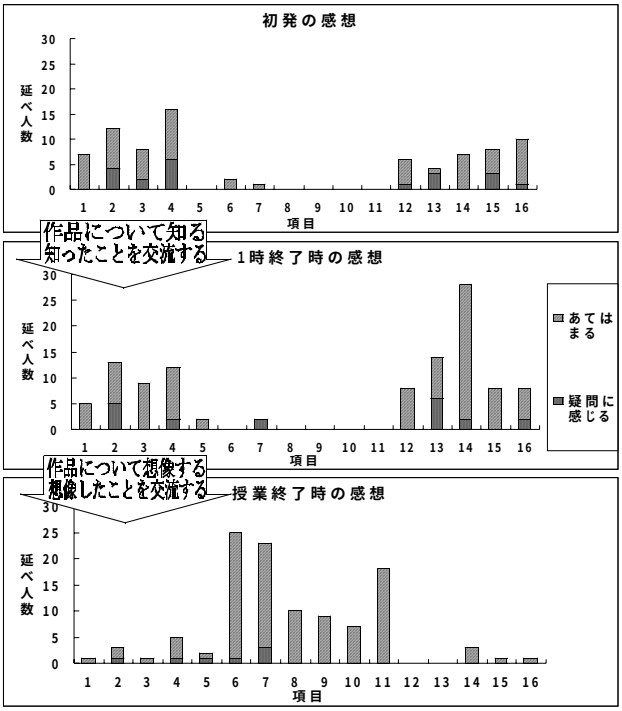


図３　関心・意欲・態度に関する生徒の自己評価票の記述



分類		項目の内容	生徒の感想の具体例
鑑賞の知によって作品の構成物に視点を向ける傾向にある内容	1	人物に関する感想とした内容	本物の人間みたい。おじさんが泣っている。
	2	背景に関する感想とした内容	人の後ろに絵がある。絵が目多っぽい。
	3	人物の顔や部位に関する内容	おじさんの帽子をかぶっている。
	4	人物の背景に関する内容	後ろに日本の絵がある。
感性と知を働かせて感覚したり考えたりした内容	5	感性と作品の構成を関連づけた内容	手紙は冬なのだろうか。
	6	人物の好みなどを想像した内容	絵が日本のことが好きなおじいさんだと思う。
	7	背景から想像した内容	日本が好きだからそれを伝えたいと思った。
	8	作品の構成や配色から想像した内容	おじさんは優しい中から優しい音で描いてある。
	9	作者について想像した上での内容	ゴッホも日本が好きだったと思う。
	10	背景から日本について想像した内容	日本にゴッホも一緒に行ったから描いた。
	11	人物の生き方などを想像した内容	日本に来たことのある７０歳。
感性とした感想は自分の体験に基づいて感じた傾向にある内容	12	作品の構成や配色に関する内容	明るい絵。暖かい色づかいの絵。
	13	作者に関する内容	この絵を描いた人はどこの人かな？
	14	感性とした人物に関する内容	おじさんがうれしそう。
	15	感性とした背景に関する内容	後ろの絵は思い出に残っていることかな。
	16	感性と作品全体に関する内容	優しい感じがする。きれい。

図４　学級全体の感想の質の変化と感想の内容の分析例

第２時ではほとんどその数には変化が見られないが，班や学級で発表し合うという活動後には，９割を超える生徒が「作品から感じたり考えたりできた」という実感をもったことが図２から分かる。また，図３に示したように，第１時では「感想を発表できた」と実感した生徒は７割強であったものが，第３時には９割を超える数の生徒が「できた」「ほぼできた」と実感している。これらのことから，自己紹介文の作成を通し，生徒が感想を相互に交流することで，感想の内容が増え，感じたり，考えたりしたことを意欲的に述べることができるようになったのではないかと思い，これは見方が深まったと考える。

次に，生徒の感想の内容の変化については，図４に示し分析する。

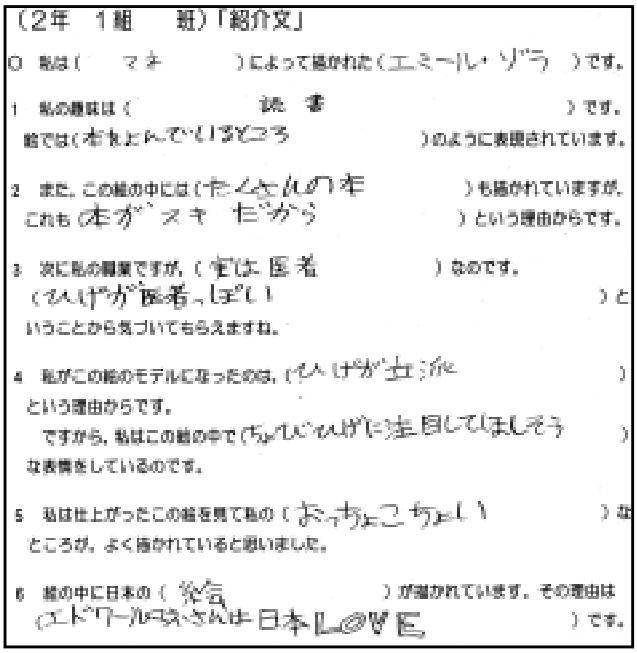
初発の感想では，項目１～４のように「男の人が座っている」「人物の後ろにたくさんの絵がある」など主に目に付いた構成物を感想として書いているものや既習の知を働かせて見た内容と，それに対して，項目 12 ～ 16 の「きれい」「明るい絵」など直感的に感じたり思ったりした内容とに大きく分かれた。また，どちらも一語文や短い文章での記述であり，作品のどこからそのように感じたかなどの具体的な内容ではないものが多く見られた。

第１時の学習活動では，班で作品について調べ，その後全体で交流をした。この活動において，生徒は知っていることを明確にし，新しく知ったことを共有するという知を働かせる活動を主に展開した。

活動後の感想には，前述の１～４に分類される構成物の発見がさらに多くなり，それらの構成物から連想するように，自分の思いをもつことができるようになったと見られる記述が目立つようになった。また，直感的に漠然とした感想を書いた生徒は，交流により作品の構成物などに視点が移り，「色がたくさん使ってあるから楽しそう」など，自らの直感的な感想を裏付けるまで記すという具体的な内容に変化した。全体を見ると，作品について調べる活動で作品を見る視点が増え，感想の内容が具体化し感想の文章量そのものも増える傾向があった。

第２時では，知を働かせる活動として，人物の背景に描かれている浮世絵に着目し，時代背景などを知る活動を行った。感性を働かせる活動としては，浮世絵の影響について生徒が自分なりの想像をした。そして，この両面をかかわらせるために，自己紹介文を班で作成することとした。

第３時では，完成した自己紹介文を学級全体で発表し合うという活動をし，感性と知を生徒自身が意欲的に働かせ，自分なりに人物について想像し，作品の多様な見方を認識することをねらった。


（2年　1組　　班）「紹介文」

0　私は（　マネ　）によって描かれた（エミール・ゾラ　）です。

1　私の趣味は（　読書　）です。
絵では（本をよんでいるところ　）のように表現されています。

2　また，この絵の中には（たくさんの本　）も描かれていますが，
これも（本がスキだから　）という理由からです。

3　次に私の職業ですが，（実は医者　）なのです。
（ひげが医者っぽい　）ということから気づいてもらえますね。

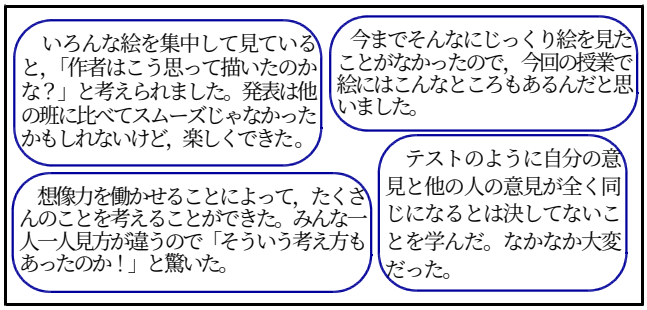
4　私がこの絵のモデルになったのは，（ひげが立派　）
という理由からです。
ですから，私はこの絵の中で（ちょびひげに注目してほしそう　）
な表情をしているのです。

5　私は仕上がったこの絵を見て私の（おっちょこちょい　）な
ところが，よく描かれていると思いました。

6　絵の中に日本の（絵　）が描かれています。その理由は
（エドワールさんは日本LOVE　）です。

図５　班で作成した自己紹介文

第３時終了時の感想では，知をさらに働かせて自分の経験に基づいた想像から「（この人物の）好きなことは日本の絵を描くことだと思う」など，人物とそのほかの構成物を自分なりの考えで関連付けることができた。同時に，感性を働かせて自分なりの思いや感じ方をもつことができるようになったと推察する。図５は，完成した自己紹介文である。


いろんな絵を集中して見ていると，「作者はこう思って描いたのかな？」と考えられました。発表は他の班に比べてスムーズじゃなかったかもしれないけど，楽しくできた。

今までそんなにじっくり絵を見たことがなかったので，今回の授業で絵にはこんなところもあるんだと思いました。

想像力を働かせることによって，たくさんのことを考えることができた。みんな一人一人見方が違うので「そういう考え方もあったのか！」と驚いた。

テストのように自分の意見と他の人の意見が全く同じになるとは決してないことを学んだ。なかなか大変だった。

図６　授業後の生徒の感想

図４で示したように，生徒はこれまで感性または知のどちらか一方を大きく働かせて作品を見る傾向にあったと思われるが，この活動を通して，感性と知の両面を働かせた内容の感想へと変化することができた。

図６に示したように，この活動を行うことにより，感想の内容が変化し，生徒自身がそのことを実感したと思われる記述が見られた。

○　個人の感想やつぶやきの質と量の変化

・　学級における個人の感想の変化

図７に示した生徒Ｂと生徒Ｃは同じ班に属しており，班の活動に伴い感想に変化が見られる。生徒Ｂは初発の感想では主に既習の知の側面から作品を見る傾向にあり，生徒Ｃは直感的な感じ方である感性の面からの内容であった。作品について調べる活動により，両者とも作品を見る視点が増えた。さらに班での交流する活動を通して，それぞれの発言などがかかわり合い，感性と知の両面を働かせるような感想に変化したと推察する。班での活動の詳細と分析については，表２に示した通りである。

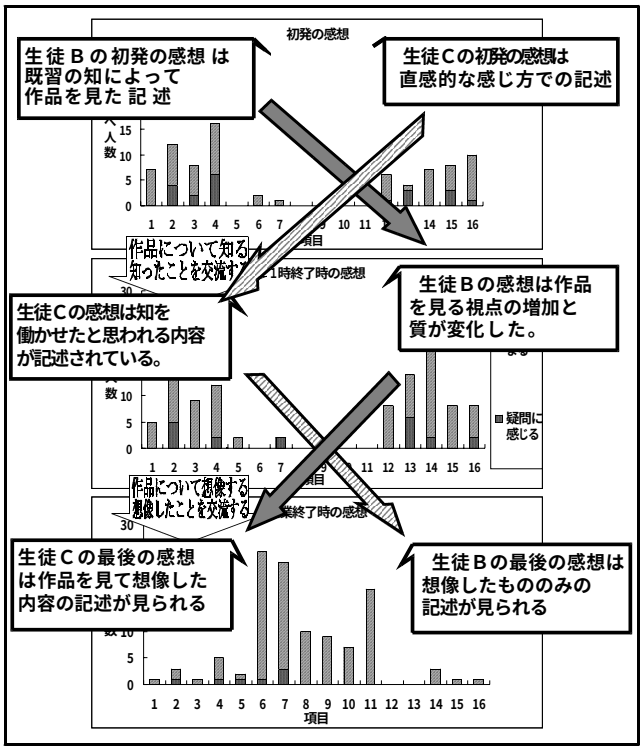


図７　生徒Ｂ，生徒Ｃの感想の内容の変化

表2　班の交流による生徒の感想や発言の変化

	生徒／学習活動	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D
第1時	**1　作品を見て最初に感じたことに関する記述**	**男の人がにこやかに座っている感じがする。後ろの絵は日本風。**	**なぜ浮世絵みたいなのが後ろに飾ってあるのだろうか。肌の色に黄色が使われている。①**	**よい年の取り方をしたおじいさんの感じ。全体的に柔らかい色づかいなのはどうして。②**	**背景がいろんな絵で埋め尽くされていて，すごくカラフルできれいだった。③**
	2　作品に描かれているものを発表し合った後作品に対する疑問点を考える。				
	3　作品に対する疑問点に関する記述	**人物はどこの国の人か。後ろの女性は日本人か。**	**なぜ浮世絵が後ろに飾ってあるのか。日本の風景が描かれている。④**	**全体的に柔らかい色遣いはなぜ？配色が黄色っぽい理由。**	
	4　作品について班で調べる活動での主な発言		「タンギーじいさんの出身について。」	「何について調べる？絵について？」 「日本って書いてあるじゃん。」	
	5　作品について基礎的なことを班で調べた後，それを確認するために，班で調べたことを学級全体で交流する活動を行う。調べる内容は，作品名・作者名・作者の出身国・描かれた時代などである。				
	6　再度作品を見て書いた感想の記述	**最初は日本人の絵かと思った。タンギーじいさんがモデルになったわけを知りたい。**	**何か日本の絵か写真を自慢しているような感じ。明るく楽しそうな人だと思う。なぜなら色づかいが明るいから。⑤**	**場所は日本かな。⑥教科書にこの絵が完成した同じ年にゴッホが日本を愛したとあった。結構な年を取り，自分の好きなことをしている人だと思う。なぜなら日本に行ったかのように描かれているから。**	**タンギーじいさんは日本の絵が好きなのかと思った。**

考　察（主に生徒Bに関して）

作品の第一印象で，生徒A，生徒Bは作品を見て目に付くものや，描かれている構成物の中で自分の知っているものを挙げることを感想としている（①）。疑問点としては，自分の体験や考えでは理解できないという作品の構成や構成物などを挙げている（④）ようである。

次の活動は班で作品について調べる活動であった。生徒Bは生徒Cにこの活動内容について説明をしている。この受け応えの中で「タンギーじいさんの出身について」という発言などから，生徒Bの視点が変化したと思われる。初発の感想やその直後の疑問では，視点は背景にある浮世絵（①④）にあったが，この活動後の感想では人物に着目した内容になっていることからも分かる（⑤）。

第１時では，生徒Bは常に積極的に話し合いに参加した。中でも生徒Cとの会話が多く，その見方を自分の感じ方として受け入れているところがある。それは生徒Cの「色づかい（②）」ということばから作品の色に着目し「色づかいが明るい（⑤）」と書いていることから分かる。色からのイメージでその性格を想像したためだと考えられる。しかし，「明るい色づかい」から「楽しそうな人」と感じたのは，第１学年での色彩の学習をした結果，知を働かせたともとらえられる。この場面で生徒Bが感性を働かせたとは考えにくいのである。

また，生徒Bが人物の背景から浮世絵などを発見しただけだったが，作品について調べたりそれを確認したりする活動を行うと，人物に着目した「明るく楽しそうな人⑤」という記述がみられるようになった。これは学習を行うことで作品を見る視点が増えたと考える。授業後の感想でも，「すみずみまで見れ，いろいろ発見できた（⑦）。」と記述しているように，見て発見することが多くなったことを成果として感じていると推測する。

	○　授業に関する感想の記述	**すごい発見やおもしろいことを見付けられてよかった。**	**すみずみまで見れ，いろいろ発見できた気がする。⑦**	**絵から想像がふくらんでまとめるのに苦労した。**	**集中して授業をまじめに受けた。**	生徒Bは，交流する活動により，十分に感性を働かせたとはいえないが，知を働かせて見ることで，それを高め，以前より作品を見る視点が増え，他の人の見方を認識した上で自分の感じ方としていた場面も見られた。
第2時	1　3点の作品の共通点を確認する。 X「タンギーじいさんの肖像」　Y「ラ・ジャポネーズ」　Z「エミール・ゾラの肖像」					第1時で生徒Bは，知を働かせることで，作品を見る視点を増やすことができた。 生徒Bは，第2時においても知を働かせて作品を見ている。それは，作品の構成物の中から日本に関するものを見付け発表しているだけでなく，詳しい浮世絵に関する構成物の記述が見られるからである。また，作品から見付けただけではなく，教科書の記述からも見付けた構成物を確認し，確信している。これは知をしっかり働かせたためだと考える（⑧）。 この第2時の班の活動では，人物に成り代わって自己紹介文を作成した。まず班でどの作品を扱うかを検討した際に生徒Bは，作品Zを提案した（⑨）。理由は，作品の構成物から容易に文章を作ることができると考えた結果の発言であると見られる（⑨）。その後の自己紹介文を作成する活動では，生徒Bは教科書等の資料から文章を作ろうとしていたようである。それは，生徒Cの想像して作成するよう（⑩）に促す発言に反応していないことに表れている。 生徒Bは第2時では，第1時にも増して知を働かせることができたため，作品から見付けただけでなく，教科書等の資料からも積極的に情報を得ることができ，それを班員に示すこともできてきた。しかし，目に見えるものに限界を感じたり，情報を得ることができなくなったりすると，そこで活動が止まり，自ら人物について想像することができない状況に陥っているのである。そのため，教師に資料を求める様子が見られたのだと考える（⑪⑫）。 これらのことから生徒Bは，班で積極的に交流を行うことができたことで，さらに知を働かせたことを確信に変えるという高まりを見せたが，感性を働かせ，想像することまでは至らなかったという様子が見られる。
	2　作品の背景の表現について班で話し合う活動での主な発言		「ゆかたと扇子。」 「浮世絵。」 「だって西洋を魅了した浮世絵って書いてあるじゃん。」⑧	「日本の絵。」 「ほんとじゃ。」		
	3　自己紹介文を班で作成する活動での主な発言	「Zがいい。」 「趣味調べる。」	「Z。だって好きなこと読書って簡単にできそう。」⑨ 「先生他に資料ない？こういう調べるものは?」⑪ 「パソコンで調べるか。」⑫	「何調べる？Xのタンギーじいさんにしようや。」 「趣味調べる人？想像でいいよ。即やって。」⑩ 「絵から見て書くんよ。作者自身のことよ。」 「部屋がフランスっぽい。」⑬ 「えー，日本の何が描いてある？」		
	○　授業に関する感想の記述	**本がたくさんあったので，趣味は本を読むことかなと思った。**	**手は挙げてなかったが，発表はした。考えを言うことができた。**	**絵から感じ取ることが多すぎてまとめるのだ大変だったけど楽しかった。**	**授業の内容がよくわかった。**	
第3時	1　自己紹介文を発表するために，班で模造紙に清書し確認する活動における主な発言		「名前。」⑭ 「覚えれん。」	「何を一番言いたいか？」 「何を一番目立たせる？」 「え～名前？」 「最後が締めなんじゃけぇ。『趣味の本を読むことなど』の『など』ですがいいよ。」 「読む順番覚えた？」		第3時では，まず班で打合せを行った。自己紹介文を学級で発表する準備段階で，一番目立たせることについて話し合った。この活動で，生徒Bは「名前⑭」と応答している。作品Zは描かれた人物の名前が作品名となっている。それで名前を目立たせることは，間違いではないと判断した生徒Bの発言だと思われる。ここでも知を働かせて活動している様子が見られる。 しかし，第3時で生徒Bは，学級内での発表を終えた感想において，自分と異なる考えを感じ取っている記述が見られる（⑮）。これまでの知を働かせて作品を見ることを中心にした作品の感想ではなく，感性を働かせて見るということを実感した結果の記述ではないかと思われる。それは，生徒Bが生徒Cと会話を多く交わしており，このことが生徒Bの見方に変化をもたらしたのではないかと考えるからである。また，生徒Bの最後の感想にある「フランス育ち⑱」という記述からも推察できる。これは，生徒Cが第2時に発した「部屋がフランスっぽい⑬」が心に残った結果ではないだろうか。このことから，生徒Bが今まであまり働かすことができなかった感性を働かせて，人物について想像することができたのではないかと推察する。生徒Bはこの班の交流を通し，感性を働かせ新たな見方をすることができるようになり，その結果，見方の深まりを感じられるようになったのではないかと考える。 初発の感想では「よい年の取り方をしたおじいさん②」など直感的に感性を働かせて見る傾向にあった生徒Cにおいては，この活動を進めていく中で，知を働かせる傾向の生徒Bとの会話から，「場所は日本⑥」と漠然と見ていた背景から，作品を見る視点が具体的になり，さらに「浮世絵が広く愛されたことについてもっと学びたい⑯」や，最後の感想の「後ろに日本の絵がある⑲」ことを理由にした記述が見られるようになった。このことから生徒Cは，感性を働かせて見ただけでなく，知を働かせて見ることもできるようになり，それを交流から実感している（⑰）。
	2　学級内で発表し合った後鑑賞活動についての感想の記述	**今まで鑑賞はあまり好きではなかったが，この授業でいろいろなことを発見するおもしろさや，みんなと自分の意見を比べたりすることの楽しさがわかった。**	**この授業で観察力と想像力が養えた。みんな違う考えをもっていることが感じ取れた。⑮**	**絵をぱっと見るのと学んでから見るのとでは印象が大きく違うということがわかった。自分自身でも感じたし友達の意見からも感じておもしろかった。浮世絵が広く愛されたことについてもっと学びたいと思った。⑯**	**６つの班がそれぞれおもしろい意見を出したりするのがすごく楽しかった。**	
	○　授業に関する感想	**おもしろかった。**	**発表は面倒くさかったがみんなのおもしろい意見が聞けた。**	**とても楽しかった。人の意見と自分の意見の違いから考えさせられた。⑰**	**みんなの前で発表してすごく緊張したけど，いい経験になった。**	
	4　３度目に作品を見た感想の記述	**モデルになった理由は日本が大好きだという思いをみんなに伝えたかったから，自然な笑顔。ゴッホに無理矢理モデルにされたわけではない。**	**趣味は絵描き。実はアメリカ生まれ，フランス育ち。年は５４。⑱**	**日本をこよなく愛している。後ろに日本の絵があるから。⑲日本画をたくさん持っている。ゴッホとは日本画の話で盛り上がったのでモデルになった。**	**タンギーじいさんは日本の絵が好き。日本文化を知っている外国人。⑳にぎやかな部屋だと思う。**	

――――	知を働かせて見たことによる感想や発言	～～～～～～～～	感性を働かせて見たことによる感想や発言
═══	交流で効果を感じたと思われる感想	**ゴシック体の文字**は生徒の感想，**明朝体の文字**は生徒の発言の内容	

・　同じ班での個人の感想の変化

学習活動では,生徒が相互に交流する活動として,班単位で話し合うことができるように，毎時場を設定した。

ここまで生徒Ｂを中心に分析を行った。このことから，班で積極的に話すことにより，知を働かせる傾向が強かった生徒Ｂは，感性を強く働かせて見る生徒Ｃの見方に影響を受けたと見られる。それは，生徒Ｃの見方を自分の感じ方に取り入れたと見られる記述⑱から推察できる。同様に生徒Ｃについても，生徒Ｂと積極的に話すことで，知を働かせた見方に気付き，それを取り入れた様子が見られる。

また，同じ班であってもほとんど発言をしなかった生徒Ｄも，初発の感想では「カラフルできれい③」という漠然としたものから，最後の感想では「日本文化を知ってる外国人⑳」という記述に変化している。これは，周りの人のやりとりを見たり，聞いたりすることで，自らも感性だけでなく，知も働かせた見方に変化したからであると考える。

これらのことから，班や学級で生徒が相互に交流する活動により，感性と知の両面を自然にかかわり合わせることができ，美術作品の見方を深めることができたと考える。

Ⅳ　成果と課題

１　成果

○　美術作品の鑑賞の指導をするうえで，感性と知の両面を働かせる活動を取り入れた指導法を展開することにより，生徒は美術作品の見方を深めることができた。

○　学習活動に自己紹介文の作成を取り入れたことで，作品を何度も見る必然性が生じ，生徒の感想は，回を重ねるごとに新たな内容へと変化した。

２　課題

○　生徒の活動の様子や感想の内容から，その感性と知の両面を働かせることはできたと思われるが，それを一体化するというところまでは十分に指導できていないのではないかと感じる。それは，美術作品について生徒自身が自分の価値判断の規準をもって見るというところまで高めた指導になっていなかったのではないかと思うからである。第３学年における鑑賞活動の指導では，生徒が自分なりに作品の批評ができるようにする指導を取り入れることの必要性を感じる。

○　本研究において，限られた時間でできるだけ美術作品を見る機会を増やしたため，知を働かせる活動の内容をできるだけ少なくし，感性を十分に働かせることをねらった。しかし，作者の人となりや，作品の制作に関する時代背景や社会情勢などについては，詳細に学習をする機会を確保しておらず，感性と知をバランスよくかかわらせて働かせた指導になっていたか，再考を要すると感じている。

以上の成果と課題を踏まえて，今後も感性と知の両面を働かせることで美術作品の見方を深めることのできる指導法について,さらに追究していきたい。

参考文献

①　アメリア．アナレス『みる　かんがえる　はなす　鑑賞教育へのヒント』　淡交社　2001

②　遠藤友麗『改訂　中学校学習指導要領の展開　美術科編』　明治図書　1999

③　北尾倫彦・生江洋一『平成 14 年版　中学校・美術　観点別学習状況の新評価規準表　－題材の評価規準とＡＢＣ判定基準－』　図書文化社　2002

④　文部省『中学校学習指導要領解説－美術編－』　開隆堂出版　1998

⑤　文部科学省教育課程課『中等教育資料』　ぎょうせい　2005